

76 吉益東洞『古書医言』引『心卵経』

館野 正美

吉益東洞の『古書医言』は、総計三十七種類の中国の古典文献を涉猟し、それらの中に散見する医学思想について、彼独自の観点からコメントを加える東洞の一大著作である。この『古書医言』の第三巻には『心卵経』と称する書物が引用されている。果たして、『古書医言』の目録には、第三巻の末尾に〈心卵経〉と、その書名が挙げられ、本文にも、

心卵経曰、上薬三品、神与氣精、恍恍惚惚、杳杳冥冥、存無守有、頃刻而成、廻風混合、百日功靈、默朝

と『心卵経曰』の原文が引用され、更にその後：

心卵経以下、皆是神仙服食之事、用於常人、則必有害矣、医家猶然、慎勿混焉、

という東洞のコメントが綴られており、彼がこの『心卵

経』の一文を見て、その内容について所見を述べていることは明らかである。又、内容的にも、東洞のコメントは全く順当なもので、何ら問題はないと思われるのである。

ところが、東洞が目にしたであろう範囲の中国の古典籍——広く『大蔵経』や『道蔵』をも含めて——の中に、この『心卵経』という書物は見当たらない。つまり、少なくとも管見の及ぶ限り、この『心卵経』という書物は存在しないのである。更に言えば、そもそも、この〈心卵〉ということばの意味さえ、全く不明なのである。

そこで、——具体的な手順は省略するが——種々の調査の結果、この『心卵経』という書名は、実は『心印経』の誤りで、現在『道蔵』（24、洞真部）に収められる『高上玉皇心印経』が当該の書物であることが分かった。果たして、その本文には、『古書医言』において東洞が引用するのと全く同じ

上薬三品、神与氣精、……

で始まる一句四字、凡て五十句の文章が記述されてい

る。東洞の引用は、その第九句の〈黙朝上帝〉の途中でとぎれている。『高上玉皇心印経』の続きは、前段の内容を受けて、更に所謂「鍊金術」的な修行の功德を、道教の最高神である〈玉皇〉の名のもとに敷衍するものである。その全文を引用するには長すぎるが故の省略ではあろうが、四字一句の文章〈黙朝上帝〉を中途で区切って省略するとは、一体いかなることであろうか。このようないわば不十分な引用の例は、この『古書医言』中にあることはないが、それにしても極めて不自然なことである。

又、そもそも東洞は、『高上玉皇心印経』のこの一文を『心卵経』の一文として認識し引用している。既に触れた通り、東洞自身が〈心卵経曰〉・〈心卵経以下〉と二度に亘って〈心卵経〉と明記して、彼の文章を綴っているからである。

『古書医言』における、この前後の内容は、『文字』や『周易参同契』といった、東洞の所謂〈神仙服食之事〉に属する一連の書物を概観する部分であり、東洞にとって、さほど重要な書物のない部分ではあるが、それにし

ても、東洞のこの不用意な引用は、一体いかなることであろうか。

少なくとも、東洞が『道蔵』(24、洞真部)に収める『高上玉皇心印経』を見ていないことは明白である。いずれかの人物に『心卵経』の一文として紹介された文章を、その通り『心卵経』の一文として読み、それに対するコメントを付しているのである。

その人物が誰であったのか、現在のところ不明である。但、実際のところ、この『古書医言』中には、果たして東洞が自ら現実にその書物(文章)を見て、おのが見解を記述しているのかどうか、いささか不明瞭な箇所がいくつかある。この『心卵(印)経』の問題が、それらを解明してゆくひとつの手掛かりになればよいであろう。

(北里研究所付属東洋医学総合研究所・
順天堂大学医学部医史学研究室・
日本大学文理学部)